

序章 ナショナル・アイデンティティに関して

A. N. パノフ

山脇 大、東郷 和彦 訳

Prologue: On National Identity

A. N. PANOV

国民国家の独自性や特異性を決定づけるナショナル・アイデンティティという概念に関して、唯一の解釈というものとは存在しない。しかしながら我々の見解では、ナショナル・アイデンティティとは、ある環境における、あるいは、近隣諸国とその国民、それらとの相互作用を含んだ、より広い世界における、国民の認識上の特性から抽出されうるものである。

このような認識に基づいて、人間同士のコミュニケーションのルールや規範、文化のおよび宗教的価値観、対外脅威についての判断、また国民の生存観念や存在・管理・発展といった組織システムに固有の伝統が形成されていく。つまり、これら全てが国民の歴史的記憶を構成するのである。ナショナル・アイデンティティは、社会像の基本的且つ規範的な結びつきを形成する、マクロ社会的アイデンティティと見做される、“文明”の概念の根底にあり、それによって、社会が自らを認識し、また同様に他者が自身を認識することを欲する。

アメリカ人研究者である S. Huntington は、様々なタイプの文明の中で、東方正教会（ロシア）文明を、また仏教文明や中華文明から日本文明を独立させて分類している。

加えて、社会構成員のエスニック・アイデンティティもまた、ナショナル・アイデンティティを構成している。その場合において、個々人のエスニック・アイデンティティは、その起源——出生地の民族の一員——のみならず、むしろそれ以上に、物質的および精神的文化をどの程度受容しているか、伝統や習慣、儀式をどれほど遵行しているか、言語や芸術的遺産をどの位主体的に活用しているか、そして自らを民族集団の史的過去、現在、そして未来に、どの程度まで関連付けるかによって決定される。

自らの民族集団への帰属意識の形成、その価値観や行動様式の同化は、社会的制度を通じて実現され、その主なものとしては、家族や教会、学校や軍隊などがあげられる。

したがって、古来の起源——《血縁》——は民族帰属に関する決定要因にはなり得ない。例えば、

日本人の DNA 分析によって、14-16%の日本人だけが《大和》族に属している一方、30%以上が韓国からの移住者であり、また中国からの移住者も同数程度であることが示されている。ロシアにおいて、混合はさらに大きくなっている。《Russkii》と《Rossijanin》という2つの概念が存在するのは偶然ではない。日本語において、それらは一絡げに《ロシア人》と訳されるが、ロシアにおいて、《Russkii》の概念はロシアの国民性／民族性への帰属（上述の通り、遺伝的に《純血の》ロシア人を探し出すのは困難を極めるのだが）を意味しており、また同時に、《Rossijanin》の概念は、とりわけ個人や集団全体の民族的起源を識別することが極めて困難な場合、全てのロシア国民／市民を指すために、よく用いられている。

人は得られた知識や文化、経験に基づいて、《自己》と《他者》に属するものを区別し、他者との関係を構築し、世界全体を認識することが可能となる。こうして形成された世界観に従い、人は具体的な状況における自らの行動の優先順位や規範、その様式を構築し、自らの認知活動の特徴をも決定するのである。その結果として、それは科学的思考、哲学、文学、神話学、そしてイデオロギーなどの発展に反映されてくるのである。

ナショナル・アイデンティティの形成において、様々な要素——地理的要素、自然的要素、神話的要素、宗教的要素、友好的あるいは敵対的な国家間関係——が影響を与えている。

個々のナショナル・アイデンティティにとって、これらの要素群は特殊かつ独特であるため、文明間において、少数の例外を除き、類似あるいは一致はし得ないという主張がある。

山梨学院大学の高橋実氏は、《生活条件、国民国家の建設過程、歴史、社会的慣習、外国との折衝手法などがこれほど強く異なっている隣国の国民同士（ロシアと日本の国民を念頭においている）が出合うことは滅多にない》¹⁾と指摘している。

言うまでもなく、ロシアと日本の文明間において、しばしば重要でありかつ根本的な差異が存在している。各々の文明は、歴史的な発展過程において、それぞれ独自の道を歩んできた。しかしながら、異なる文明は互いに接触し、明確な関係を有してきたのみならず、他者へ重要な影響をも及ぼしうるのである。加えて、文明の根源的な相違にもかかわらず、とりわけ急進的もしくは革命的变化の時期においては、国民国家は同一の問題に直面しており、その問題の解決が類似の帰結を招く事例は少なくない。逆に、正反対の結果をもたらす場合もある。

ロシアと日本の文明の形成およびその発足は、他文明からの非常に強力な影響の下で行われた。ロシアの文明はビザンツやモンゴル、その後の西欧の影響下に、日本の文明は中国、そして戦後はアメリカの影響下にあった。

自然環境における両国民の生活条件の根本的な差異は、地理的に見た場合、ロシアが平坦であり、大陸国家であった一方、日本は山地が多くを占める島国であったことに起因する。しかしながら、ロシアにおいては敵対勢力の侵入に対する自然障壁が、圧倒的に欠落していた。

実際に、ロシアは国家建設以来、常に近隣の部族、民族、そして国家の侵略を撃退することを余儀なくされた。その結果として、ロシア国民の歴史的記憶の中に、他国と比してより緊迫した《對外脅威》感が深く根付いたのである。

その一方で、日本は13世紀に2度、モンゴルの短期的な強襲を受けたのみである。それにもかかわらず、外国による侵略への畏怖は、日本国民の歴史的記憶の中に、何世紀にもわたって残り続けた。

こうして、日本、そしてロシアにおいても、ナショナル・アイデンティティを維持・強化するために、《外敵選択》戦略が採用された。

これに関して、日本においては、《シベリアからのロシアの脅威》は17世紀から用いられ、20世紀末まで保持された。一方で、ロシアにおいては、《日本の脅威》のテーゼは20世紀初頭の時点では長続きしなかったが、その後1930年代から《ペレストロイカ政策》期まで、積極的に標榜された。

《外敵の脅威》戦略は、世論に隣国に対する否定的な印象を植え付けただけにとどまらず、その国民の気質に対しても好ましくない印象を与えることとなった。

加えて、ロシア（ソビエト連邦）において、《敵対》期が比較的短く、またその批判の矛先が、日本の軍国主義と日本人の他国民への残忍さ、とりわけ極東における日本の介入期とアジアにおける侵略戦争期に集中していたとすれば、日本において、ロシアおよびロシア国民への《否定主義》は、およそ4世紀にわたり根付いていたことになる。

それでいて、日本人の《最高の気質》は、ロシア人の《最悪な性格》と対比されてきた。日本人の気質が、誠実、公正、礼儀、率直、忠実に体现されるとすれば、ロシア人のそれは、不誠実、無謀、乱雑、妄想、疑心、敵意、貪欲、御座なり、買収によって表されることになる。

日本人の世論において、現在でさえなお、ロシアとロシア人に対する否定的な印象が支配的であるのは偶然ではない。

《悪いロシア》のテーゼの証左として、二国間関係の歴史の否定的なページ——ソビエト連邦による日ソ中立条約の侵犯および第二次世界大戦終了期における日本への参戦、《日本領土の不法略奪》、ソ連収容所における日本人戦争捕虜の不当かつ非人道的扱いが参照される。また、日本は自らをG7の構成要員と認識し、とりわけアメリカ志向であるため、西側の見解では“一般的に受容されている国際ルールを侵害する”（2010年代初頭のクリミア併合とウクライナ南東部における内戦）ような、ソビエト連邦／ロシアの全行動に対して、上のテーゼが言及されるのである。

しかしながら、両国民の国民性に類似点がないわけではない。例えば、以下の類似点があげられる：

- －力への敬意
- －他国民への猜疑心および不信感（日本の《鎖国》、共産主義時代における《閉じた》ソビエト連邦）

- －社会における均一性と調和、公共の利益の形成、集団組織と集団思考への欲求
- －情緒性、自然環境における美の知覚

ナショナル・アイデンティティは、対外政策の策定およびそれを達成するための手段と方法の決定に、直接的な影響を与える。そして、対外政策目標の実施にあたっては、ある歴史の時点における、支配的な文化的・宗教的価値観が重要な役割を担うのである。

例えば、それは中世日本における《武士道》であり、また 19 世紀末から 20 世紀前半に風靡した、日本人が西洋人やアジア人に勝るといふ人種の優越論である。ロシアにおいては、《モスクワ―第 3 のローマ》説、スラブ主義や共産主義イデオロギーがそれにあたる。

国家が通過する様々な歴史の時点において、その解決如何によって国家の存続とアイデンティティの保持のあり方が決まるところの課題の設定が、時には決定的に異なっていた。

例えば、ビョートル 1 世期の近代化または国内基盤保持によるその後の安定性維持、日本においては、17 世紀初頭からの鎖国または 19 世紀後半の急激な近代化の対立があった。

国家の運命を握るこの最重要な動向に、最も本質的な影響を与えるのが、ナショナル・アイデンティティである。ナショナル・アイデンティティは、このプロセスを推進させることができる一方で、その内容を骨抜きにすることで、プロセスそのものを停止させる場合もある。

加えて、このプロセスがどこまで過激化するか、およびその帰結の 1 つとしての外交政策の在り方 ― 攻撃的、受動的、あるいは平和的 ― は、ナショナル・アイデンティティ、もしくはその単純化された概念である、国民性に依存する。

何世紀にも渡って、ロシアおよび日本の社会構造は、国家および社会を建設・運営するにあたっての垂直性および階層性の支配、特に農村をはじめとする経済の共同運営、そして限られた都市数と都市人口という状況下での農村地域における人口集中によって決定されてきた。19 世紀末には、このロシアと日本の文明の特異性が、両国において、市民社会と市場経済を構築するための西洋モデルの完全な受容を妨げることとなった。

19 世紀末には近代化が開始されたが、両国は西洋と比較して、より低い経済水準、社会発展段階にあった。ロシアは対外拡張の遅れを挽回することに邁進し（中央アジア、コーカサスの併合、シベリアへの進出）、日本は近隣において自国領土の拡大を試みており（1592 年と 1598 年の豊臣秀吉による朝鮮出兵、織田信長による中国征服計画）、また《国内拡張》― 北のアイヌ民族の搾取と北海道の《植民地化》― を実現させた。

グローバル化の影響下にある現代世界において、経済的・政治的・文化的環境の統合に資する動きが進む中で、ナショナル・アイデンティティの発展に、2 つの基本的な傾向が読み取れる。

一方では、西欧やアメリカといった国々において、多文化主義政策の実行を含め、ナショナル・アイデンティティの意義が不明瞭化、ないしは低下している。

他方では、民族中心主義やナショナリズムに表れているように、一定の国民の間では民族意識の高揚が確認されている。ロシアや日本もその中に含まれており、そこでは自国の独自性やアイデンティティの保持、また現代世界における自国の位置づけと役割の確立に向けて、より積極的に力が注がれている。

日本において、議論の中心となっているのは、国家および社会の将来の発展方向に関するものであり、基本的にその解は二者択一の中にある——《普通の国》への回帰の道筋を進む、つまり事実上、西側モデルを追従するのか、あるいはグローバル化の過程で形成されつつある、基本的には西側モデルである国家・社会・経済機関を活用しつつも、日本の伝統に、何よりも確固たる文化的独自性に、それらの機関を《嵌め込む》ことによって、民族的特性を堅持し、国家としての排他性を保持するの—である。

一方で、ロシアにおいては、《欧米主義》と《スラブ主義》の間の議論が再燃しており、それは社会主義システムの崩壊と新たな価値観——欧米の市場経済と民主主義モデル——を志向したベレストロイカという、非常に痛みを伴うプロセスにおいて蓄積された、国民の激しいトラウマと結びついている。

世界の発展による新たな環境において、ロシアと日本は 19 世紀中頃と同様に、各々のアイデンティティの搜索期を迎えていると結論付けることができよう。

ロシアにおいては、リベラルな倫理的行動様式が新たに生じており、これは集団主義の精神性とは全く結びつかず、むしろ個人主義を志向しているものであり、《社会主義モデル》の公準を基礎とした社会とは異質なものである。

日本においては、日本社会を多くの階層的・民族的な絆に結び付けてきた伝統的な価値観が弱体化、さらには崩壊の危機にあるその時に、《日本型資本主義によって生み出された個人主義の時代》に対する批判の声が大きくなっている。

本研究の著者らは、ロシアと日本における文明の形成期および発展期を回顧しながら課題設定を行い、史的プロセスの類似と不一致、そしてその中におけるナショナル・アイデンティティの役割を明らかにするとともに、ナショナル・アイデンティティが、ロシアと日本の両国と両国民の長期的な友好関係の確立へ向けた道を、どこまで妨げるか、あるいは切り開くか、という疑問に答えようと試みている。

註

- 1) 下斗米伸夫・島田博編 (2002) 『現代ロシアを知るための 55 章 エリア・スタディーズ』、明石書店。

